

## テネシー・ウィリアムズと南部的背景 (1)

山 田 富 貴

ポール・ニューマン演出による映画『ガラスの動物園』を最近観た。原作の中に気になるセリフが2カ所あって、注意して聞いた。気になるセリフというのは、冒頭の食事の場面で、口やかましい母親アマンダと息子のトム、そして大人しい娘ローラの一家が食卓を囲むシーンに出てくる。ブラマンジュを取りに席を立とうとした娘に、母親はこう言う。

AMANDA: No, sister, no sister—you be the lady this time and I'll be the darky.<sup>1)</sup>(下線部筆者)

もう一カ所は、いつものように母親が娘時代に過した Blue Mountain にあるプランテーションでの日々の事を語り出す件りに出てくる。

AMANDA: One Sunday afternoon in Blue Mountain—your mother received—seventeen—gentleman callers! Why, sometimes there weren't chairs enough to accomodate them all. We had to send the nigger over to bring in folding chairs from the parish house. (148) (下線部筆者)

私が懸念していたのは、darky, nigger といったようなあからさまな侮蔑語が、映画という公共性を帯び、したがって倫理的であることを前提とした媒体の中でどう取り扱われるのだろうか、ということだった。案の定と云うべきか、これらの言葉は、colored boy に置き換えられていた。が、私は何か釈然としない気持ちになった。映画をつくる側の取り上げ方の問題であるとすれば、オリジナルを改変して映画のスク립トに移行させるとしても、原作者の意図が台なしになる恐れについては余り問題にする必要もないかも

しれないだろう。またこうした改変によって、人種差別に対する配慮を欠くといった批難に対する考慮も当然必要であろう。しかしながら、それでもやはり何か割り切れない気持ちが残ったのは、この作品を劇作品として見た時に、これらの言葉を取り換えることで、背景としての南部が、登場人物と関わっている意味が薄められる、あるいは、場合によっては捨象される恐れがあると思ったからである。というのは、とりわけこの劇作品を考える際に、奴隷制の歴史を含め、いささか特異な性格を有する南部社会と、それと関わることでその存在を大きく規制されることとなった個人との相関は、無視できない重要な要素であると私は考えているからである。であるが故に、背景としての南部は、書き割りの的なものではなく、リアリティを付与された濃密な空間として、観る者に印象づけられねばならない。アマンダが繰り返し語り、辛い現在を生きていく「糧」となっている優雅な雰囲気を持った「Blue Mountain の日曜の午後」の生活も、かつての奴隷制に支えられた旧南部の貴族社会のイメージが混入されている。彼女のそうした夢想的、非現実的な性向を、生き方のどこかに付与するに与っている「南部」を考える時、彼女の口をついて出る言葉は、やはり darky であり、nigger でなければならないだろう。さもなければ、南部社会の伝統と神話によってその生き方を規定されているこの女性の存在そのものが、どこかぼやけたものになってしまう。さらに、アマンダに背負わされた過去の故に、劇中における他の登場人物との間に織りなされる劇的緊張が、ややもすると弱められてしまうことにもなりかねない。

そこで本稿では、『ガラスの動物園』、『欲望という名の電車』の2作品を取り上げ、劇的緊張、対立を生み出す上で重要な要因となり得ているものとしての南部的背景について考えていきたい。まずは各作品に登場する女性、アマンダ、ブランチを通して、南部淑女 (Southern Lady or Southern Belle) という概念の発生と展開について歴史的に考察することによって、劇中における南部的背景を考えていく一歩としたい。

## I

『ガラスの動物園』のアマンダ、『欲望という名の電車』のブランチに共通する点をあげるとすれば、かつての南部プランテーションにおける優雅な生活の記憶が、逼迫した現実生活の中で断ち切られることなく存続し、そうしたロマンスの世界に浸り込む一方で、それに呪縛されている生き方を指摘することができよう。こうした2人の生き方を、現実逃避という批判めいた言葉で裁断する見方も多い。しかし、彼女たちの生き方を南部という社会の、いわば要請により生み出された南部淑女の典型として見た時、事情は異なる。つまり、彼女たちの現在に連なっている過去は、彼女たちが背負ったのではなくて、背負わされたものなのだと考えると、必ずしも生き方に対する否定的見解ばかりでは済まされはしまい。むしろ、ではそれ以外に一体どんな生き方が可能だったのかと問うた時、彼女たちの生に対する同情的（共感的）見方も生まれてこよう。そこで、南部淑女という概念の成り立ちと、推移を歴史的に概観することで、彼女たちが生きている現在と、生きてきた過去をつなげ、そうした連続性の中で彼女たちの生における過去/現在の相関関係を明確化しようと思う。そこにおいてはじめて、「否定的」と見る見方そのものにも、解釈の諸層が生まれてくるのではないかと思う。

南北戦争以前の、いわゆる ante-bellum South<sup>2)</sup>における南部社会は、強固な階層性に基づく社会であり、その頂点に立つのが多勢の奴隷を抱えたプランターという貴族的階層であったことはよく知られている。南部淑女というのは、こうした南部上流社会に属する女性であり、その精神風土により育まれた観念でもある。ところが、南部上流社会といっても、華やかな社交界のイメージを伴うようなものではなく、実際は閉鎖的で、流動性にとぼしい農村的社会であったというのが実情であった。つぎの引用は、Anne F. Scott

女史の *The Southern Lady* によるものだが、当時の (ante-bellum South における) 南部社会と女性について、以下のように記述されている。

Courtship and love affairs supplied much of the excitement in a relatively uneventful rural society, but marriages were as often as not pragmatically or even casually contracted and in any case romance gave way almost at once to practical things.

For most women life was narrow and provincial. Communications were poor ; in many places the mail came once a week, perhaps to a distant post office. In a thinly settled county one day was pretty much like another. Women could speak of being confined to the house “until spring” by bad weather and sickly children. Life quite naturally centered on family, and letters are filled with detailed reports on uncles, aunts, parents, and children.

For the majority, life was simple, demanding, limited to domestic excitements, and quite self-contained.

Within this framework the southern family lived and developed its pattern of existence. Family ties were strong, and even the great mobility of the westward movement did not always diminish them.<sup>3)</sup>

Scott 女史の指摘にあるような、南部社会の閉鎖性、自足性が要因となって、父権を中心とした家族の神話が築き上げられていったのであるが、「神話化された家族」は、奴隷制を保持していくために<sup>4)</sup>、ピラミッド型の権力構造を家族内に作り上げることが不可欠の要件だったという事実とも相まって、家父長的家族制度の形成に連なっていったのである。そして、こうした制度としての家を背景にして、南部淑女という観念は、そのイメージ、役割、行動規範等の面において、作り上げられたものであった。

Scott 女史によると、南部淑女のイメージは、「道徳的完全さ」と「従属」だとされ<sup>5)</sup>、そうした与えられたイメージを起点として、男性支配による南部社会における期待される女性像が作られ、それに基づいて役割、行動が定

型化されていくことになる。と同時に、福音神学を通して、「理想とされる女性」の概念が、拡大強化されていくことになる。と史は付け加える。

God in his inscrutable wisdom has appointed a place and duty for females *out of which* they can neither accomplish their destiny nor secure their happiness!!<sup>6)</sup>

こうして、南部の女性たちは、神と男によって規制された行動と、制度化された役割を押しつけられ、それを忠実に守っていかうとしたのであった。

Southern women sought dilligently to live up to the prescriptions, to attain the perfection and the submissiveness demanded of them by *God and man*. (イタリックは筆者)<sup>7)</sup>

神の名の下で、女性だけが道徳的、倫理的に正しくあるべきだ、といったダブル・スタンダードは、女性の側での無垢であることへの過敏な意識を生ぜしめる。その裏返しとして、汚れ、罪、に対する過剰な意識を女性の内側において芽ばえさせたとも言えよう。そうした点で、外面的規制のみならず、精神内部においても抑圧された存在として、南部淑女を思い描いてみることができる。

もうひとつ、キリスト教神学の他に、南部の女性を像として固定化していくのに与っていた力として、南部社会擁護のためのイデオロギーとの関連を挙げておく必要がある。

南部社会はその秩序を保持していく上で、裏を返せば、秩序を崩壊へと導きかねない危機に曝されていたが故に、女性の従属を包みこんだ家族を「社会の安定の象徴」<sup>8)</sup>として必要としていたのである。奴隷制イデオロギーを南部が擁護するのは、奴隷制の崩壊による経済的損失を気づかうことよりも、南部社会が構造的に崩れていくことへの恐れからである。したがって、奴隷制を維持し、社会の安定をはかるためには、家主であり領主 (a master and lord) である男性と、その弱さ故に男性の庇護を常に必要とし、ひたすら従属することで幸福が保障されている女性からなる固い結束を持った家族こそが、南部の社会制度の根幹において必要だったのである。それというの

も、女性が従属の立場を無視し、家の中で造反することは、家の名誉を汚がし、その解体につながるというだけにとどまらず、奴隷制を崩壊へと導き、ひいては南部社会の根底的な破産へと地崩れの的に連なっていくという構造を、南部社会が抱えていたからに他ならないからだ<sup>9)</sup>。その意味では、まさに南部淑女という存在は南部社会存続のために選ばれた犠牲の山羊であったと言えよう。

つぎにこうした南部淑女が、文学作品の中でどう描かれていったかという事柄に、眼を転じてみる。

われわれは、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』という小説の作品世界についての印象として、華やかなプランテーションの生活や、主人公スカーレットの秀麗な姿を思い浮かべがちである。こうした印象は、ラヴ・ロマンスとして、ハリウッド風に作り上げられた映画の影響が多分にあるようで、南部史を忠実に辿ろうとしたミッチェルのそもそもの着想と構想からは大きくかけはなれているようだ。Kathryn L. Seidel は、いわゆるプランテーション・ノヴェルに登場する Southern Belle について興味ある分析を行なっている。冒頭、「スカーレット・オハラは決して美しくはないが、彼女の魅力にいつの間にか男たちはとらわれてしまう」<sup>10)</sup>(傍点筆者) という書き出しで、主人公スカーレットを描写しているが、女史は、こうしたスカーレットという女性のとらえ方を、プランテーション・ノヴェルという、ひとつの領域において、Southern Belle の性格、および外見描写を行う際の伝統に沿ったものであるとしている<sup>11)</sup>。さらに、女史によれば、プランテーション・ノヴェルにおいて、Southern Belle が描かれる際に、二つの要素、つまり、どういう文学形式(内容)が当時の(1820-50年頃)増加しつつあった女性読者層に好まれるかということと、南部社会がどのような小説が書かれることを望んでいるのかということが考慮され、反映されているという<sup>12)</sup>。重要と思われるのは後者である。後者に関して言えば、Belle という言葉は、言葉そのものの持つ意味の指示性からはずれており、したがって、

女性の外見的美しさについて言及したりするのではなく、南部社会が理念として掲げる女性像に適っているかどうかということ、意味合いとして内包しているのである。つまり、表現の対象としての女性の、女性美そのものを讃美すること自体に意味はなく、南部社会の（支配原理としての家父長的家族制度の）理念に適うことを以て美しいとする傾向が感じ取られる。より具体的には、「愛と結婚と子供によって占められた生活」を基盤にした、「家庭」のみが女性の「場」であるというディスコースを作り上げ、それを固定化していくこと。それこそが、まさに南部社会が望む所であった。こうしたディスコースは、ビクトリアニズムと通底している女性に対する枠づけのようであるが、ただ南部という共同体の側に立って見れば、北部の側からの南部社会への批判への対抗上、女性を家庭の守り手として象徴の台座の上に据え、家庭の平和がいかにもよく保たれているかをより強調的に示すことで、南部社会の安定性、優位性を実証しようとする願わずにはいられなかったのである。こうして Southern Belle は、社会に直接的に参与する機会を与えられることなく、家庭の守り手として、共同体の理念にとって「美しくあること」を要請され、表現化されていくことになるのである。

ところが、南北戦争後の南部の女性たちはどうなってしまったのだろうか。南部の敗戦は、ただちにその価値の崩壊と理念の崩壊をもたらし、北部への政治的従属と、北部資本による南部経済の蹂躪という屈辱を、南部人に植えつける所となった。南部社会の基盤としての家父長的家族制度もまた、奴隷制廃止とともにその存在理由を弱められたと言えよう。そうしたことは、南部の女性たちにとって、据えつけられた象徴の台座から離れ、いかなる形にせよ、ひとりの女性として自立せざるを得ないことを意味したが、同時にその困難さをも意味していた。つぎの引用は、南部の女性が従来依拠することができた社会的基盤が崩れ去った時に、彼女たちが余りに男性支配による「家」に対して「寄生的」であったがために、家庭以外の領域において

自らを適応させていくことがいかに容易ならざるものとなり得るかを示唆している。

Since men took the initiative in proposing marriage, it was only natural for women to develop those aspects of their personality they believed to be attractive to men and to surpass the others. Their intellectual development suffered, for men were known to shun intellectual women. Because men demanded it, women had come to regard themselves as no more than “pretty toy” or “mere instruments of pleasure,” rather than as whole human beings with souls to be saved and work to do in the world. The premise that marriage was woman’s central goal led to the neglect of her education, ...<sup>13)</sup>

さらに、また、エレン・グラスゴーの“The less a woman knew of life, the better she was supposed to be able to deal with it.”という言葉は、南部の誰よりも重くのしかかった南北戦争後の南部女性が生きていくことの辛さを、重々しいアイロニーの響きを以て、苦々しく伝えているように思える。

ウィリアム・フォークナーの『エミリーのバラ』という小説は、南部淑女の典型である主人公エミリー・グリアソンが、南部淑女という概念が存立する基盤を失ってしまった社会において、その混迷の中を生きていこうとする様を描いた作品だ、という風に読むことができる。

南部の名家の娘、エミリー・グリアソンは、一個の活人画のように、「馬のむちを振り、両足を踏んばった黒い影絵となって前景を大きくふさいでいる父親の背後に、ひっそりと立ち続けている」<sup>14)</sup>、いわば、家父長的南部の「家」の中に、一見幸福そうに縛りつけられた女性として、ジェファーソンの町の人々の思いの中に生き続けている。父親が死んだ時、かたくなにその死体の埋葬を拒んだのも、エミリーの思いの中に、父親という「制度」の下以外で生きることへの激しい動揺と不安があったからだと推察できよう。ひ



とりの女性として、自らの力で生きざるを得なくなった時、エミリーは、ホーマー・バロンという北部人の工夫監督と恋に落ちる。およそエミリーの家柄とは不釣り合いな、しかし男性的魅力に溢れたこの男に、エミリーはのめり込んでいく。旧世代に属する年老いた女たちは、エミリーが貴族の義務 (noblesse oblige) を忘れてしまったと言って陰口を言い合い、もはや、南部淑女たり得なくなった彼女を、「かわいそうなエミリー」<sup>15)</sup> だとして、哀れむのである。しかしながら、父権に従属することを除いて、「幸福」を得る保障を見出せなかった彼女が、父親という規制から解放され、ホーマーとの恋に、純粋に自己を表現しようとする思いがエミリーの中にあったことは確かである。が何よりも、父親の死によって「屋敷以外は何ひとつ手元に残らなかった」<sup>16)</sup> ばかりか、「陶器の下絵を教える」<sup>17)</sup> 程度にしか生活のための手段を持ち得なかった、言ってみれば南北戦争後の社会の混乱と、その変容の中を生き、典型的南部淑女であるエミリーにとって、立場、身分を越えて、いかなる形態であれ、「結婚」という制度の下での新たな従属を見出す以外に生活の方途はなかったと考えられよう。Southern Belle という象徴の台座からいち早く抜け出し、「一文の金の多少にこだわる」<sup>18)</sup> 現実の中に自らの姿を見出す以外に生きる術はなかったのである。一時期、市長であったサートリス大佐が税金の特別免除を与えたものの、かつての南部の伝統と誇りの象徴であった当のサートリス大佐が亡くなった後は、新しい世代の到来とともにジェファーソンの町は急速に変化し、税金の支払いを迫られ、彼女の生活は逼迫の度を増していったのである。

やがてエミリーのホーマーとの恋は破綻を迎える。それは、エミリーが余りに純粋であり過ぎたためなのだろうか。それとも、あのスカーレット・オハラのごとき逞しい生活力と楽天主義に比べ得るような適応能力を欠いていたせいなのだろうか。われわれが彼女の死後、長く閉ざされたままであった新婚の飾りつけをした部屋に、「抱擁の形」をしたままの白骨化した男の死骸を目にする時、ただ言えるのは、すでに空無化した南部淑女という観念に

もてあそばされ、抑圧され続けてきたエミリーというひとりの女性の生と性のあり様が、生々しく、そしてもの哀しく伝わるばかりだ、とだけである。かぎり行く南部の残光の中で、新たに押し寄せる波動におののきながら生きたエミリーという女性を、フォークナーは赤裸に、そして巧みに描き出していると思う。が、最後に残るのは、果たしてエミリーは観念の呪縛から逃れることができたのだろうか、という想いである。

## II

さて、南部淑女という観念の歴史を踏まえつつ、こうした観念による呪縛の中にあると考えられ、したがって、『エミリーのバラ』のエミリー・グリアソンの文学的系譜に連なると考えられる、2人の女性、ブランチとアマンダについて考えてみることにする。

この2人の女性は、プランテーションでの生活を背景にした、美化された夢的世界をひきずっている、その一方で、旧南部から生まれた南部淑女という観念に支配されている。とはいうものの、そうした観念を作り上げ、また、それが依拠していたはずの家父長的支配原理は崩れ去り、結果、彼女たちには、これといった頼るべき生活の方途も、また自らの力による生活の手段も持ち合わせていないという点で共通している。

ブランチの若い夫は、性的倒錯の発覚に苦しみ、自殺を遂げる。Belle Reve の男たちは、遊蕩三昧の挙句、その土地をひとつ、またひとつと譲渡証という唯の紙きれに変えていった。アマンダの夫は、気楽な気持ちで失踪し、“Hello—Goodbye”という短い便りを最後に、杳としてその行方は分からない。皮肉にも、その夫は、居間にかけてられたにこやかな笑顔を浮かべた古ぼけた写真の中でしか、劇中において父親の存在を明らかにされることはないのである。それは、あのエミリー・グリアソンの屋敷の、ほこりにまみれた居間に飾られた「父親の肖像」と同じく、父権の失墜を象徴していること

は言うまでもないし、同時に、かつて、彼女たちの存在を規定していた制度としての「家」そのものが崩壊していることをも示唆している。したがって、そうした彼女たちを取りまく状況を明示するために、この『欲望という名の電車』、『ガラスの動物園』という二つの劇には、像としての、あるいは制度としての父親を想起させる人物は、誰ひとりとして登場していないのである。

つぎの引用は、Belle Reve の財産処分をめぐる、ナポレオン法典を盾にとり、財産の行方を追求するスタンレーに対して、ブランチが、怒りを以て弁明する件りである。当然、その怒りのほこ先は、遊蕩三昧の挙句、宏大な Belle Reve を破産へと導いた男たちに向けられている。

BLANCHE: There are thousands of papers, stretching back over hundreds of years, affecting Belle Reve as, piece by piece, our improvident grandfathers and father and uncles and brothers exchanged the land for their epic fornications—to put it plainly! [*She removes her glasses with an exhausted laugh*] The four-letter word deprived us of our plantation, till finally all that was left—and Stella can verify that!—was the house itself and about twenty acres of ground, including a graveyard, to which now all but Stella and I have retreated. (284)

このセリフは、従属を旨として、家を守ることに専心することで保障されるはずの「幸福」も、ブランチにはもはや訪れることはなく、行動と役割を規制する南部淑女という理念だけが残って、実際には、南部の女性を制度化してきた家父長的権威も、家の絆も崩壊していることを物語っているのである。さらに言えば、かつての南部社会が有していた価値体系そのものが崩れ去っていることの証左ともなり得ているのだ。

劇の冒頭、ニュー・オリンズに着いたばかりのブランチは、猫の叫び声に飛び上らなばかりの驚きを示す。すでに心の平安を失い、不安にさいなまれているのである。そうした彼女の心の状態を瞬時に表出させるという点で、「猫の叫び声」という仕掛けは、巧みな着想と言えよう。こうした仕掛けに

より、観客をも一気に畜ならぬ状況を察知させるのだ。では、こうした彼女の不安は、どこから生じたものなのだろうか。

第一に挙げられるのは、生活の方途もなく、また、そのために与えられて然るべき「場」を持たないという、物質的、環境的困窮にまつわる不安である。さらに重要なのは、「南部」と「淑女たること」によって規制されているが故に、罪や穢れに対する過敏な反応が心の内奥に生じている点である。ポーランド人と結婚し、その子を身ごもり、貧しい境涯の中にも、開放的自由を生きている妹とは異なり、あくまでもブランチは、南部女性として枠づけられた生き方から逃れることはできない。それが故に、ローレルの町での性的放縦や、スキャンダラスな過去は、一層激しい呵責となって、彼女の精神にのしかかっている。南部淑女という課せられたコードを踏みはずしているという思い。それが、罪意識を生み、心の不安をかきたてているのである。劇中3度(2場, 7場, 11場)挿入されている入浴のシーンは、ブランチがそうした不安に絶えず嘖まれている事実の裏付けとなっている。つまり、こうした入浴シーンは、共通してブランチの穢れ、罪に対する過敏な意識の反映として、浄化、あるいは聖化へ向う、いわば“brand new human being (276)”に変身するための儀礼的行為となっているのである<sup>19)</sup>。

2場における入浴シーンは、その前場において、ブランチがスタンレーの動物的眼差しに出合ったことで、彼女の存在そのものの不安を感じ取ったことに起因する。1場においてニュー・オリンズの町に登場したブランチには、“She is daintly dressed in a white suit with a fluffy bodice, necklace and earrings of pearl, while gloves and hat, looking as if she were arriving at a summer tea or cocktail party in the garden district.” (245) というト書きによって示されているように、この町の猥雑さとはおよそ場違いな、淑女たるにふさわしい雰囲気と物腰がある。が同時に、そうした「場違い」な感じが、かえって彼女の虚勢的、防御的な姿勢を印象づけることになる。その姿はまさに“uncertain manner” (245) と言うにふさわしい。ブランチ

は、淑女という「理念の鏡」に映った、あるいは、あらかじめ映るはずの、自己像（虚像）を、自らのものとして守り抜くことで、かろうじて心の平安を保ち得るのである。しかしながら、ニュー・オリンズの町の猥雑さは、そんなブランチの自己像を「歪めてしまう」言ってみれば「現実の鏡」なのである。が、何よりも「現実の鏡」としての機能を備えた存在は、スタンレーである。まさに“gaudy seedbearer” (265) そのものであり、一目で女を値踏みする、彼の動物的直観力の前に曝された時、やがて、自らの過去（穢れた自己）を問いつめられ、追いつめられた挙句、淑女たる自己像がひび割れることを思うと、ブランチは心の動揺を押えることはできないのだ。ブランチの穢れに対する意識は、淑女たる意識の強さに比例する。したがって、2場における入浴という行為は、スタンレーの眼差しに出合った時、自らの自己像が破壊される脅威を感じ取ったが故に、こうした入浴という「儀式」を通して、自らの穢れを浄化し、淑女という自己像の再生をはかり、不安から逃れる必要からであったに他ならない。

ブランチの不安は、怒りとなってそのはけ口をステラにも求める。家に縛られ、その崩壊の哀しみを一身に背負ったブランチは、家を捨て、スタンレーと自由に暮すステラを激しく詰る。

BLANCHE: I, I, I took the blows in my face and my body! All of those deaths! The long parade to the graveyard! Father, mother! Margaret, that dreadful way! So big with it, it couldn't be put in a coffin! But had to be burned like rubbish! You just came home in time for the funerals, Stella. And funerals are pretty compared to deaths. Funerals are quiet, but deaths—not always. Sometimes their breathing is hoarse, and sometimes it rattles, and sometimes they even cry out to you, “Don't let me go!” Even the old, sometimes, say, “Don't let me go.” As if you were able to stop them! But funerals are quiet, with pretty flowers. And, oh, what gorgeous boxes they pack them away in! Unless you were there at the bed when they cried out, “Hold me!” you'd never suspect there was the struggle for breath and bleeding. You didn't dream, but I saw!

*Saw ! Saw ! And now you sit there telling me with your eyes that I let the place go ! How in hell do you think all that sickness and dying was paid for ? Death is expensive, Miss Stella ! And old Cous in Jessie's right after Margaret's, hers ! Why, the Grim Reaper had put up his tent on our doorstep !... Stella. Belle Reve was his headquarters ! Honey—that's how it slipped through my fingers ! Which of them left us a fortune ? Which of them left a cent of insurance even ? Only poor Jessie—one hundred to pay for her coffin. That was all, Stella ! And I with my pitiful salary at the school. Yes, accuse me ! Sit there and stare at me, thinking I let the place go ! I let the place go ? Where were you ! In bed with your—Polack ! (262)*

妹に対して Miss Stella と呼びかけたのは、ステラを家を捨てた他人として見る皮肉が込められているからだ。その口ぶりの奥には、南部の女性としての生き方を捨てたステラに対する批難が込められている。「その時あなたはどこにいたの！。ベッドでいちゃついていたんでしょ、あんなポーランド男なんかと！」というセリフには、とりわけ最後の Polack ! (あんなポーランド男なんかと！) という激しい口調には、ブランチが生きてきた南部淑女としての生き方の規範から逸脱しているステラの生き方に対する批難があり、そして怒りがある。こうしたブランチの心情を理解する一助として、W. J. Cash による指摘を挙げて置く。Cash は、南部における女性の位置づけは、南部の優位性を土台とした、南部という観念そのものと不可分に結びついているとし、つぎのように述べている。

We strike back to the fact that this Southern woman's place in the Southern mind preceded primarily from the natural tendency of the great basic pattern of pride in superiority of race to center upon her as the perpetuator of that superiority in legitimate line, and attached itself precisely, and before everything else, to *her enormous remoteness from the males of the inferior group*, to the absolute taboo on any sexual approach to her by the Negro. (イタリックは筆者)<sup>20)</sup>

南部においては、家柄の選良であることを示す指標として女性は位置づけられているが故に、そのように位置づけられた女性は、劣等集団に属する男たちとは大きな隔りを保っていなければならないのであり、黒人の側からのそうした女性に対する性的な接近など絶対的タブーである、というコードが存在していた。ブランチはそうした南部女性に課せられたコードをなお、厳密に生き続けようとしている。したがって、Polack! とののしたのは、ステラが家を捨て、ポーランド男と暮しているということ自体のせいではなく、南部女性に課せられたコードを踏みにじったその精神構造に対する憤りからである。ブランチの思いの中には、Polack という言葉が、Negro という言葉に匹敵する程の屈辱感を伴っているとも推察できよう。それ程に「南部」は、ブランチに、生活面においても、また、精神内部においても、大きくのしかかっている。こうして、抜き難い「南部」を内に抱えたブランチと、いともた易く「南部」を離れていったステラとの間に葛藤が生じることになるのである。

つぎに、アマンダの場合について考えてみよう。ブランチ同様、彼女の存在もまた、南部の女性に課せられた伝統的価値による支配から免れてはいない。以下に挙げる引用は、アマンダが娘ローラに向かって「定められた場」を持たないことが女性にとっていかに悲劇的であるかということ、彼女の南部での体験を通して言って聞かせる件りである。当の娘は、「ガラスの動物園」によって象徴されるファンタジーの中に逃げ込み、古いレコードの中の郷愁に救いを求め、自らを閉ざし、現実世界へ踏み出そうとはしない。これは、そういう娘に対する母親の怒りであり、嘆きとなっているセリフである。

AMANDA: What is there left but *dependency* all our lives? I know so well what becomes of unmarried women who aren't prepared to occupy a position. *I've seen such pitiful cases in the South—barely*

tolerated spinsters living upon the grudging patronage of sister's husband or brother's wife!—stuck away in some little mousetrap of a room—encouraged by one in-law to visit another—little birdlike women without any nest—eating the crust of humility all their life!

(イタリックは筆者)

Is that the future that we've mapped out for ourselves? I swear it's the only alternative I can think of! [*She pauses.*] It isn't a very pleasant alternative, is it? [*She pauses again.*] Of course—some girls *do marry*. (156)

結婚しない女性がどれ程みじめであるか、また、「依存すること」以外に女性の生きる道はないという事実の重さを、切々とローラに訴えているのであるが、その際、アマンダはそうした哀れな女性のケースを「南部では」いくつも見てきたという。この「南部では (in the South)」というセリフの言い回しは（強勢をどのように置くかという問題）は、2人の女性にとって南部がどのように関わっているかを考える上で注目してみる必要がある。

南部社会によってその生き方を規制され、現在もなおそうした枠付けの中で生きているアマンダと、そうした母親の中に生きている過去を知らず、ただただ自閉的世界に踏みとどまり、母親の世界に心を開こうとはしないローラ、という2人の位置関係を考えると、「南部では」というその一言は、ローラにとって「新情報」に属することになり、ここに強勢を置いてしゃべるセリフ、あるいはアマンダの心理において強勢が置かれているセリフ、ということになる。一方、南部社会においては、未婚の女性がひとりで生きていくのは難しいものであるということが、一般通念として、観客も含め、2人間ですでに確認され、共有されている「旧情報」であるとすれば、このセリフはフラットな言い回しになる。

それに続くセリフで、場を持たない南部の女性がねずみ取りのような粗末な部屋をあてがわれ、挙句、親せき縁者の間をたらい回しにされ、生涯、屈辱のパンの一片を食べ続けなければならない、とアマンダが語る時、そこには彼女の眼を通して見た南部の過去が持つリアリティがあり、その心に刻み



込まれた南部が生々しく伝わってくる。当然アマンダの心の中には、南部社会の混迷の中を生きてきた女性として、何の生産手段も持ち得ない生き方に対する不安と、そうした生き方への自戒がある。つまり母親は、常に彼女の中で抜き難く生き続ける「南部」を起点として判断を下そうとするのである。自閉的生活を送る娘に、gentleman caller などという、およそ階級意識をむき出しにしたような、時代がかった人物の到来を願うのも、母親の中に生きる「南部」のせいだと言わねばならない。とすれば、「南部では」の箇所は、とりわけて強調的にローラに伝えられなければならない。

しかしながら、そうした母親の中の「南部」は、娘ローラの世界とは通じ合うことのない、断絶したままの世界なのである。それがために、アマンダのローラに対する苛立ちは一層つより、ローラは自閉的であることを止めない。その結果、劇中における母娘の間の葛藤が生じていくことになる。

要約すれば、これら二つの劇における、女性の登場人物の間に起る劇的葛藤に共通した構図はこうなる。

家父長たるはずの男たちの権威が失墜し、制度としての家そのものが崩壊している中で、なお南部淑女という、男性による支配原理によって制度化された観念によって自己規制しながら生きているブランチ、アマンダという人物に対して、ステラ、ローラはそうした観念を拒絶、ないしはそういう観念から逃避しているところから劇中における対立、葛藤が生じているということになるだろう。

(次号に続く)

〔註〕

- 1) *The Theatre of Tennessee Williams Vol. 1* (N. Y.: New Directions Pub. Co., 1971), p. 147. 以後、この書からの引用はかっこ内の数字によって示される。
- 2) ante-bellum という言葉の使い方に関して言えば、多くの南部人にとって戦争というのは南北戦争が唯一の戦争であり、したがって、南部においては ante-bellum という言葉そのものは、歴史上 1607 年から南北戦争までの期間を指すことになる

のだが、通常使われる場合は、南部が連邦を脱退する直前の20~30年の間の期間を指す場合が多い。因みに、その対語として、postbellum という言葉が使われるのはまれで、Reconstruction または New South の方が好んで使われている。*The Encyclopedia of Southern History* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1979).

- 3) Anne Firor Scott, *The Southern Lady: From Pedestal to Politics 1830-1930* (Chicago: The University of Chicago Press, 1970), pp. 42-43.
- 4) 奴隷制保持ということに関して、John Sekora および Houston A. Baker, Jr. による発言を参考にされたい。

アメリカという荒野への使命の大成功という主<sup>マスター</sup>テキスト（その重要な章は、捕囚物語、荒野から楽園への精神的遍歴、福音の伝道からなる）を築き上げる上で、黒人の物語を語ることは大きな矛盾を背負うことになる。がイギリス系アメリカ人は社会の対立者として黒人を指名し、包含による排斥によって、アメリカという叙事詩の構築に励むことになる。その際に使われるメタファーは、主人的で、文明的なるもの（主・テキスト）と、単純で、依存的、未開的なもの（奴隷・テキスト）であり、両者が対比的に使われる。語り手（つまり、著者〔author〕として、権威性〔authority〕を付与されたもの）としての白人は、奴隷を「不完全な人間」として証明することで、主人たるものの自己定義を行い、権威承認行為として黒人の生涯についての物語を作り上げていく。その具体的方策としてつぎのような手だてが取られる。

「……奴隷解放宣言が1862年に発布される以前に現われた奴隷の生涯についての物語には、奴隷所有者が奴隷の労働のみならず、彼らの用語、彼らの言語全体、を統制（それによって歪曲）しようとする話がたくさん出てくる。主人たちにとって奴隷の言葉は強力な、致命的効果を持つものであった。とりわけ奴隷主たちは、奴隷が彼らに呼びかける際に彼らが自分で付けた肩書きである「将軍」「General」とか「大佐」「Colonel」を使えと要求することによって、奴隷の発話を統制しようとした。（所有者も奴隷もひとしくそのような工夫が偽りであることを勿論弁えていた。）それでも、こうした工夫が馬鹿げていればいる程、主人たちは憑かれたようにその使用を強制した。ヘーゲル的なアイロニーによって、主人たちに主人の肩書きなり権利を与えうるものは奴隷のみだったのだ。』（『抹殺されたもの——1760—1945年の奴隷物語、主・テキスト、アフリカ系アメリカ人の著作——』J.セコラ & H. A. ベイカー Jr. 『思想』、岩波書店、1987年1月）こうした奴隷制擁護をイデオロギー化するための「語り」と、南部の女性の位置を対置させて考えてみることができよう。とりわけ、1850年代の女権拡大運動/奴隷解放運動、1960年代のウーマン・リヴ/公民権運動、といった一連の運動が同時発

生的であるという歴史的事実の関係性、および主・テキスト、従・テキストのメタフ  
ァーの対比構造が持つ類似性を考えてみると興味深い。

- 5) *The Southern Lady*, p. 7.
- 6) *Ibid.*, p. 8.
- 7) *Ibid.*, p. 8.
- 8) William R. Taylor, *Carvalier and Yankee: The Old South and American National Character* (N. Y.: George Braziller, 1961), p. 146.
- 9) Bertram Wyatt-Brown は、*Southern Honor* (N. Y.: Oxford University Press, 1983) の中で、“What was at stake in the promiscuity of a dependent woman was her protector’s status, without which he could not remain an effective member of society. The unchaste wife or daughter did not betrayed herself alone. Since there was little recognition of a morality apart from community custom, the erroing woman had to be condemned along with the husband, father, or brother who was unable or unwilling to control her or to avenge the seducer or rapist.” (p. 54) といった事象を指摘し、こうした事象は、南部社会に対しても指摘し得るとしている。さらに著者は、南部社会における名誉という観念の背後には、女の力を恐れる男の存在 (misogyny) があるとしている。つまりは、男性支配の強い南部のような共同体を維持していく上で、女を疎外された存在のままにして置くことが肝要だったのである。
- 10) Margaret Mitchel, *Gone with the Wind* (N. Y.: Avon Books, 1973), p. 5.
- 11) Kathryn L. Seidel, “The Southern Belle as an Antebellum Ideal”, *Southern Quarterly*, July, 1977, 387.
- 12) *Ibid.*, 387.
- 13) *The Southern Lady*, p. 62.
- 14) William Faulkner, “A Rose for Emily”, *The Portable Faulkner* (Harmonds-worth: Penguin Books Ltd., 1981), p. 437.
- 15) *Ibid.*, p. 438.
- 16) *Ibid.*, p. 437.
- 17) *Ibid.*, p. 434.
- 18) *Ibid.*, p. 437.
- 19) Mary Ann Corrigan, “Realism and Theatricalism in A Streetcar Named Desire”, *Modern Critical Interpretations* (N. Y.: Chelsea House Publishers, 1988), pp. 52-53 を参照した。
- 20) W. J. Cash, *The Mind of the South* (Alfred A. Knopf, Inc., 1941: rpt. N. Y.: Random House Inc., 1969), p. 118.